
悔恨の海 - side S.S -

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悔恨の海 - s i d e S . S -

【Nコード】

N1425K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

《悔恨の海》の別視点から見た話。

愛しいとか好きだとか、陳腐な感情は知らない。
純粹で澄んだ心に憧れてた。無気力な俺に全てを注ぎ込んでくれた
健気さに惹かれた。

人嫌い。

それが俺の固有名詞だった。職場でもそれは定着しており、覆くつがえそうとも思っていなかった。

しかし、それに否と声を上げる子が現れた。彼女と話すようになったことで、何年も降り積もった俺への評価は払拭されてしまった。他人の心は何と変わり身の早いものだろうか。彼女が俺に笑いかけ、冗談を言えば、他の人もそれに倣う。少しずつだが周囲との壁が溶けていくのを自分でも感じていた。

彼女は温かかった。まるでお袋のようだ。人を好きになるのがどんなことかなんて俺にはまだわからなかったけれど、その温かさに焦がれていたのは事実だった。だから、彼女から告白を受けた際に頷いてしまったのだ。

泥沼。その一言で全て表せる。

二人の関係は次第にバランスを失っていった。俺は感情を言葉に出すのが苦手だったし、相手を心配させたくなかったから何も言わなかった。同じように彼女も、俺が外へ出るのをめんどくさがったり、会うのを拒んだりしても、ただただ困ったように笑っただけだった。

何故、皆に好かれていても笑顔でいる彼女が自分なんかと一緒にいるんだろう、と塞ぎ込んだ夜は数え切れない。

そして、三ヶ月と少し経った頃、彼女は口にした。身勝手な俺へ、最初で最後の質問を口にした。

「まだ、好きかどうかかわからない？」

稲妻に頭をかち割られたような衝撃が俺を襲った。事実だったからだ。俺は、優しい彼女に甘えていた。

気付いてしまった。彼女の重荷になっていることに。

その後は、坂道を転がり落ちるような容易さで、呆気なく別れて

しまった。罵声を浴びせ、これ以上ないほど傷付けて遠ざけた。
恨んでくれればいい。

嫌いになってくれればいい。

今年の春には違う会社へ転職すると言っていたから、もう会うこともないだろう。

愛しいとか好きだとか、陳腐な感情は知らない。

純粹で澄んだ心に憧れてた。無気力な俺に全てを注ぎ込んでくれた健気さに惹かれた。

ありがとう、ごめん、なんて言葉は口にしなくなかった。いつそ付き合わなければよかったと思ってしまうのは俺の弱さ故か。

「由利」

別れる直前くらいから、口にしなくなってた彼女の名前は、特別な痛みを内包し、乱雑でゴミ屋敷と化した部屋に反響した。

揃いで買った指輪とクリスマスにもらったネックレスは外せなかった。

それからはまた元通り、俺はあまり笑わなくなつて他人に近付かなくなつた。

この前、偶然見かけた彼女は、前々から“お兄ちゃん”と慕っている横山誠よこやままことと笑いながら歩いていた。横山さんは柔らかな眼差しを彼女へ注ぎ、彼女は楽しそうに飛び跳ねながら何かを喋っている。兄妹のような雰囲気きょうまいのふんいきが二人からは感じられた。

彼女がこちらを向いて、「誠也せいや」と呼ぶことはもうないだろう。

最初から、違う世界の住人だったような隔たりを感じて踵を返した。足は勝手にあの海へ向かう。砂に足をとられる彼女に手を差し伸べたのはほんの数カ月前のこと。なのに、ひどく懐かしい。寄せては引く波間なみは見ていて飽きない。波音は少し乱れた心に染み込んだ。

ごく当たり前のように、指輪とネックレスを外す。こうしなければ、先へ進めないと自分に念じて腕を後ろに引いた。

ブツと腕を振り下ろす。

握り締めていた指輪とネックレスは、そこに変わらず存在してい

た。投げられなかった。これまでは、要らないと思ったもの全て、切り捨ててこられたはずなのに。

「本当に……………俺って……………」

幼い頃に受けた傷が闇を形成し、自らを蝕んでいる。

他人を拒絶しながらも、救いを求めて誰かに縋ろうとした自分が恥ずかしかった。皆、それぞれ自分の抱えているもので手一杯のはずである。なのに、彼女なら俺の分も引き受けられると馬鹿な思い込みをしてしまった。

結局のところ、利用しようとしていたのだ。優しい彼女ならば愚かな俺を見捨てないと　歪んだ優越感が滲み出していたのだ。

なのに、何故だろう。

彼女が他の誰かと幸せになる姿は見たくないと思ってしまった。

凝り固まっていたはずの悲哀は、目の奥を熱くし、そのまま肌を濡らした。

春の訪れを告げる桜の花弁が一片、海面に浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1425k/>

悔恨の海 - side S.S -

2010年10月20日20時05分発行